

もし哀川くんが禁書目
録を救ったら

哀川くん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

聖夜の夜に起こる奇跡。夏・・・では無く聖夜に、上条当麻・・・ではなく哀川君が禁書目録を救っちゃいます。

※なんとなく気に入ってるのにじファンより転載

目次

もし哀川くんが禁書目録を救ったら

1

もし哀川くんが禁書目録を救ったら

「つち……. . . なアンなアンですかア？朝つばらからゴンって音で目が覚めさせられるなしたアついてねエなア」

俺こと哀川拓也は学園都市第一位に君臨する超能力者（レベル5）. ではなく絶対能力者（レベル6）だ最強ではなく、無敵な筈なんだが今でもスキルアウト共がちよつかいかけてきやがるンでもオ諦めた。因みに幼なじみの上条優奈つつウのが居ていつも何かあるごとに世話をかけてくるンだが. 微妙に面倒臭エつてのが軽い本音だなア

ガラツ

とりあえず. 俺は布団なンギア干してない筈. だよなア？目の前に有るこの白い布団みてエなのは一体何なンだア？

「. いた」

「はア？」

「おなかすいたっていつてるんだよ？」

「. よしッ、俺は何も見えないンだ。コレは全て幻覚《イリュージョン》だ」

「・・・・・・・・(ウルウル)」

「ツチ・・・・その捨てられそうなチワワみてエな目を止めやがれ。良心が痛むからよオ・・・・・・・・。しょうがねエ俺が何か作ってヤンよ」

・・・・・・・・と言つても家に有るのは珈琲に、小麦粉、カレールーに玉葱、人参、牛肉、ジャガイモにご飯か・・・・・・・・カレー作れるな。コンだけありやアよオ・・・

「カレーで良いかア？」

「有り難うなんだよ！」

「ハイハイ」

と言うわけで Let、s c o k k i n g っつてなア。用意するモノはテメエ達の家にも有るであろオカレールーに玉葱つつつた普通に入れるモノ共だ・・・・・・・・絶対はどこぞの学園のピンクの悪魔みてエに酸味が欲しくて塩酸、硫酸とか入れるンじやねエぞ？死ンじまうからなア。アイツ達は特殊な訓練をしてやがるンだ・・・・・・・・きつとなア。つつても後は普通に作るだけだからなア・・・・・・・・

く省略く

つウ訳で、出来たからあのシスターに渡してくるぜエ。

「おい、そのの」

「私は『そのの』じゃなくって『インデックス』って言うんだよ！」

「………巫山戯てンのかア？絶対に偽名だろオが……何だよ目次つてよオ」

「そのままの意味だよ？私の名前は『禁書目録《インデックス》』魔道図書館としての正式名称は『Index—Librorum—Prohibitorem』なんだよ。」

「………魔術……なア？信じられないコトもねエンだごなア………。流石に科学に身を置いてるンでなア………」

見せてくれれば有り難いンだがなア………。多分使うことは出来ないンだろオなア………。きつと。名前から察するに知識だけつつウモンなンだろオが……あ、優奈連れてこれば良いンじゃねエか？何かしらの反応起こすだろオしよオ。

「ちよつと待つててくれねエかア？お前が言う魔術つてのが本当にあるつてンならきつとソイツが証明してくれるからよオ」

「そいつ？」

「あア………。ちよつと待つてろ」

（省略）

「と、言うわけで連れてきた」

「一体何なんですか？上条さんは忙しいですのことよ？」

と言うわけでコイツが『上条優奈』俺の腐れ縁かつ幼なじみかつ旗女《フラグメイカー》だ。色んな男に旗《フラグ》を建てては俺が出てどオにかしてンだがよ……。

コイツはいつの間にか逆ハ作ってんだろオナア・・・と想像が出来ンぞ。

「いや、コイツ」

「コイツじゃないよ！インデックスだよ！」

「インデックスってのが魔術についてウンタラカンタラで」

「ゴメン、魔術はムリだわ」

「じゃなくって、コイツ・・・インデックスが言ってた魔術が本なら何かしら持ってきてるはずなんだよ。其れをテメエの右手で触って破壊出来れば・・・」

「ああ・・・なるほどな」

「と言うわけで、インデックス何かそう言うモノ持つてるのかア？」

「この修道服は『歩く教会』と言って、龍の一撃でも耐えうるんだよ！」

「そおか・・・。服はヤバイから・・・」

「大丈夫だつてきつと・・・」

パシッ

「ほら？嘘だったr・・・」

ハラハラ

「あああ・・・」

「い・・・いやああああああ!!」

「かかったのか教えてくれ」

「本気で疑問なんだよなア……。ココ8階だぜエ？しかも手すり(?)が凹んでたしよオ……。」

「追われてるんだよ」

「……はア？誰に」

「魔術結社に……。だよ」

「なんでなんだ？」

「10万3000冊の魔導書だよ」

「……ンなもん何処にあるんだよ？」

「……テメエ完全記憶能力持つてンのかア？」

「……うん」

「だったら説明がつかないア」

「え？どういうコトなんだ？」

「そんなンだからテメエは鳥頭なんだよ……」

「はア……。この阿呆の娘どオしてくれよオカ？今なら分かるぜエ……。あの某ファミレスの佐藤氏の気持ちがなア……。まア、阿呆の向き（ベクトル）が違エけどなア……。」

「むっ？なにおう！」

「順を追って説明してやんよ。先ず完全記憶能力つつウのは分かるかア？」

「名前からして一回見たら忘れない能力じゃねえの？」

「Exactly。で、だ。」

「うん」

「インデックスはその能力を使って魔導書を頭に入れた。だよなア？」

「うん・・・よく分かったね？」

「そオでもなくちやア、学園都市第一位兼絶対能力者(レベル6)は名乗れねエからなア」

「スゴイんだね！君って」

「ン・・・ああ・・・。俺の名前は哀川拓也だ。覚えとけ」

「うん！わかったよ！」

「あ、私の名前は上条優奈だから」

「了解なんだよ」

「さて、追われてるとして・・・お前は逃げ切れるのかア？」

「・・・大丈夫だよ。この近くに教会が有るはずだから・・・」

「匿ってもらえるってかア？」

「うん」

「な、なあ・・・私話について行けないんだが・・・」

・・・コイツKYかア？今のは黙って空気になつてた方が良いに決まつてるのになア。

「黙って聞いとときやがれ鳥頭ア」

さて・・・

「ココに匿つてやろうかア？」

「駄目だよ・・・魔術師が来ちやう・・・ゆうなが歩く教会を壊したから多分・・・」

「はア・・・だから俺達を頼れつて」

「・・・じゃあ・・・」

地獄の底まで付いてきてくれる？」

ツチ・・・こちらに来るなつてかア？最近の少女は頭が良いねエ・・・。

「じゃあ、また会つたら！」

「行くトコ無かつたら俺達ン家に来やがれ。もてなしてやる」

く省略く

つつつかよオ・・・何で外に出たンだろオナア？俺・・・本気で馬鹿だろ・・・

「アンタ！私と勝負しなさい！」

「面倒臭エ」

「良いから・・・戦え！」

「一体なアンなアンですかア？テメエと俺には差があるンだよ・・・。死ンでも埋められ

ないよオな差がなア」

「．．．もオ、不幸すぎんだろ．．．何が嫌で第三位に勝負挑まれるの？馬鹿なの？死ぬの？」

「うらあああー！」

「だから．．．もオやだわア．．．。面倒だから．．．おつと優奈ガード！」

「は!？」

ピキイイイーン!

「じゃ、後は宜しく」

「ふ、不幸だああああああああああああ!!」

く省略く

よし、何事もなく帰って．．．血の臭い．．．だと？

「インデックス．．．だよなア？何で掃除機共が群がって．．．？ツツ!？」

血みどろじゃねエか!？」

「おいおい．．．誰だよオ。こんなコトをした馬鹿はよオ．．．」

「うん。僕たち魔術師だけど？」

「．．．何でこんなことしやつがたア？」

「回収するためだよ？其れ（．．）を」

「……ほオ……」

「ま、今から死んじやう君には関係ないけどね。『我が名が最強である理由をここに証明する (Fortis931)』」

「はア?」

「魔法名……ま、簡単に言うのと殺し名だよ。」

……コイツ俺が誰か分かってンのかア?

「俺を誰だと思ってるんだア?……はア……コレだから三下はよオ……。よオく耳の穴かつぽじって聞きやがれエ……。俺の名前は……」

哀川拓也……コレは表の名前であり……ま、気に入ってる名前だなア……。ここから先は魔法名つつウのと同じ殺し名だ……

「俺の名前は『一方通行《アクセラレータ》』だア……ここから先は一方通行だ……。さっさと元の居場所に引き返しやがれエエエ!」

「吸血殺しの紅十字!!」

「ツハ!俺にんなモノが効くともオオ?」

「は!?!摂氏3000℃を耐えられる筈が……!」

「俺を殺したときやあなア……超能力者 (レベル5) 共全員連れて来て核爆弾8発ぐらいぶっ放しやがれ!……この三下がアアアア!」

バキイ!

「……つち、殺さないのはせめてもの情けだからな……。さて、と……。冥土返し
ントコにつれて行くかねエ……。ン? 冥土返しって誰かってエ?……。簡単に言う
とチートにつきるなア。流石に死んだヤツは生き返らせることはできねエけどよオ、腕を
もぎった位だったら普通に回復させつからなア……。だから俺は敬意をこめてこう呼
ぶ……。『公式ブラックジャック』と……。」

〈省略〉

「おい、カエルウ」

「……もうちよつと敬意というモノを持つとうよ」

「いや、持つてるんだがなア?……。取り敢えず急患だア」

「……見せて……。コレは……。刀傷?」

「……。アイツでは無かったんだなア……。」

「ま、取り敢えず直ぐに手術に入るから」

「オーケー把握」

「……。さアて、あの阿呆はどうなったのかねエ? 少しばつか心配だし迎えに行くかア。

〈省略〉

「……。おい……。」

!!

〈省略〉

「おい、カエル！どオなつたんだア!？」

「大丈夫、出血は酷かったけど何とかなつたよ」

「・・・ふう・・・」

「で・・・何で病院なんだ？」

「カエルが居るからだなア。コイツには何回も世話になつたしなア・・・。主に仕事とかでな」

「・・・さようですか」

「・・・ま、取り敢えず良かったア・・・。流石に死んだとなると・・・な。後味悪すぎるだろう?べ、別に心配なんかしてなかつたし!」

「ツンデレは美少女の特権だぞ?」

「うっさいわ鳥頭が!」

「んだとく!?!」

「ハア・・・」

「喧嘩するなら外でしてくれないかな?」

「あア、すまねエ・・・」

「すみません」

「取り敢えず、彼女の喉に変な紋章みたいなモノが有ったんだけど心あたりはあるかな？」

「ねエ」

「ないな・・・あ、」

「どオしたア？」

「一つ思い当たる節が」

「・・・カエル、ちつとでていってくれねエかア？」

「・・・君がそう言うときは本当に危ない話だね。ま、ケガをしないように頑張ってくれ」

「センキューな」

「・・・さて、と」

「どオ言うことだア？」

「何か神崎ってヤツがインデックスの脳がパンクするだの何だのつつつてたからさ」

「・・・頭、ね」

「・・・考えろ・・・考えろ・・・」

「他に何も言ってなかったのかア？」

「えくと、記憶が入りきらないようになって、だから記憶を消すって」

「他には？」

「んゝ．．．」

「早くしろオ！」

「ちよつと待つて．．．．あ！」

「どオした!？」

「脳の85%を魔導書が占めていて、一年でパンクするつて」

．．．！そオだ、そオだよ!!んな危険なモン野放しにするかア? いや、しねエ。だつたら首輪をつけてしまえば良い。なら．．．そオだ！

「おい．．．魔術師連れてこい、大至急だ」

「え? 何処に居るか分からないぞ!？」

「ココのどつかに居るぞ? どオせ、心配だの何だのな．．．。つと来たみてエだなア」

「おい、其れを返して貰おうか」

「(ニヤア)．．．さア．．．It、s show time! 優奈手を其の喉の紋章に突つ込めエ！」

「え? ああ!! 行くぜ!!」

「さアて．．．おい、魔術師共．．．面白いモノを見せてやるオ」

ドガッ

「ツガ・・・」

「よし、良オクやった優奈ア・・・コレでいよいよか・・・」

「何を!？」

「さアて、終わらせようぜエ? 魔術師イ。この長い不幸のプロローグをなア」

『警告。第3章、第2節。第1から第3までの全結界の消滅を確認。再生準備・・・失敗。自動再生は不可能。十万三千冊の書庫の保護の為、侵入者の迎撃を優先します。書庫内の十万三千冊より、結界を貫通した術式を逆算・・・失敗。該当する魔術は発見できませんでした。これにより侵入者個人に対しての迎撃術式のみを優先。最も有効な魔術の組み合わせを検索・・・完了。これより侵入者迎撃の為、聖(セント)ジョージの聖域を発動します』

「痛てて・・・」

「マジ優奈GJだぜエ」

「・・・最初にこう言うのは言おうぜ?」

「オレも知らなかったからなア」

「・・・ま、いいか。いつものコトだし・・・ずっと待ち焦がれてたんだろ、こんな展開を! 英雄がやってくるまでの場つなぎじゃねえ! 主人公が登場するまでの時間稼ぎじゃねえ! 他の何者でもなく! 他の何物でもなく! テメエのその手で、たった一人の

女の子を助けてみせるって誓ったんじゃねえのかよ！ずっとずっと主人公になりたかったんだろ！ 絵本みてえに映画みてえに、命を賭けてたつた一人の女の子を守る、魔術師になりたかつたんだろ！ だったらそれは全然終わってねえ!! 始まってすらいねえ!! ちつとぐらい長いプロローグで絶望してんじゃねえよ!!——手を伸ばせば届くんのだ。いい加減に始めようぜ、魔術師！」

「……何時も関心するよお前の説教にはよオ……。さアて、オレも本気出すとしますかア……」

護りたい……何を？絶対折れようとしないうイツ達を。

救いたい……何を？誰にも言えず心の中で泣き叫ぶ少女を。

壊したい……何を？この不条理な運命を。

なら、どうする？

——力の限り壊してやろう。力の限り護ってやろう。力の限り救ってやろう。

我の名において誓う。力を貸せ……力を貸せ熾天使イイイイイイイイ!!

「グガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

クケケ……久しいなア、全くよオ。演算も疲れるしよオ……。ま、対価としては安いな

「……貴方達は一体……?」

「俺は哀川拓也。それ以上でもそれ以下でも無い。見せてやる聖夜の奇跡ってヤツをよオ……」

「私はコイツの助手ってヤツだよ」

「俺はテメエを何時助手にしたよ……」

今は12月25日の午前零時

「ツチ、君たちに手を貸すのは嫌だけど仕方ない……。『我が名が最強である理由をここに証明する(Fortis931)』!!」

「其れで良いんだよオ！」

「さて、取り敢えずはあの魔方陣みたいなのをぶつ壊せば良いんだよな？」

「正解だ」

「その一撃は龍の一撃と同じです！」

「んなモン……。俺の一方通行に常識は通じねエ！」

ギャアアアアアアアアアアアアイン!!

「行け！優奈アアアアアア！」

ツチ、インデックスが優奈に攻撃をしかけよオとしてやがる……。

「『救われぬものに救いの手を(Salvare000)』!!」

「ナイス！痴女！」

「痴女では有りません!!!コレには魔術的な・・・」

「今はそんな場合じゃ無いだろう!」

「・・・スミマセン。ステイル・・・」

「さアて、今度こそ行きやがれエ!」

「応よ。・・・この物語(せかい)が、神様(アンタ)の作った奇跡(システム)通りに動いているってんなら——まずは、その幻想をぶち殺す!!」

ピキイイイイイン

「——警、こく。最終・・・章。第、零——・・・。『首輪、』致命的な、破壊・・・再生、不可・・・消」

・・・ツチ、アイツ氣イ抜いてやがる・・・!間に合えエエエエエ!

「氣イ抜くな阿呆が!」

グギャ!

「ツグ・・・」

「大丈夫か!?!」

「クケケ・・・俺様を舐めんな。・・・後は・・・頼・・・んだ」

ズザッ

「又、無茶をしたね……。しかも、病室までぐちゃぐちゃにして……」

「だから弁償するつつつてんだろオが……」

……取り敢えず、あの後は何とかなった。優奈が記憶を失う……。なんてこともなく、俺の演算能力が無くなる……。なんてこともなく、インデックスが死ぬ……。という悲惨なエンディングにもならなかった。所謂ハッピーエンドってヤツだ。ま、痛いのは俺の懐の中だな……。まア、必要経費だと思つて……。な。優奈はあの後俺にクツキーを焼いてきた……。ま、美味かった。神崎、スタイル組はツンデレのよオな一言を残して帰つて行つた。そしてインデックスは……

「たくやあ！おなかすいたんだよっ！」

「優奈にたかれコンチクショヨ」

「たくやのほうがお金持つてるもん」

・ ・ ・ ま、元気でやってやがる。ま、めでたしめでたしってヤツだなア。